



漆崎延房編輯

近世紀聞

編 十二

自明治二年  
至同十年

卷之三

リ 5  
9390



門 5  
號 9390  
卷

近世紀聞十二編卷之三

東京 深崎延房輯

藤保氏日記

○仁恤雨露の如く及不<sub>レ</sub>衆咸萬歲と謠ふ事

復説軍監永山何某の辨天崎の砲臺に至り將分る  
甲乙の面會及及び寛仁大度の朝旨演<sub>ス</sub>順  
歸を登き趣<sub>ル</sub>後懇々説諭為たり<sub>レ</sub>今<sub>ハ</sub>や  
脱士等の力も弛<sub>シ</sub>勢ひ挫け<sub>テ</sub>或<sub>ハ</sub>速<sub>ク</sub>降伏<sub>ス</sub>  
一謹慎をべ<sub>シ</sub>と言ふも何<sub>レ</sub>又<sub>ハ</sub>或<sub>ハ</sub>異議を唱<sub>ヘ</sub>  
今更帰順せん事を武夫の耻<sub>ニ</sub>所<sub>ナ</sub>り<sub>ト</sub>議論  
區々<sub>ク</sub>一定せざれを此上<sub>ニ</sub>總督の意見<sub>ヲ</sub>聞得

近世紀聞 十二編卷之三

たる後、事決まると如きなりとて松岡磐吉相  
馬王計等五稜郭へ赴き、榎本自餘の面々も是  
等の旨を談おれを既より五稜郭より前の日病  
院の醫員たる高松小野の両氏の許へ返書の旨趣  
云々と語り決死の体を示せしを松岡等を立  
歸り斯と演説為すれども五稜郭は競と此砲臺を  
淺間よて弾薬及び兵糧の備へとも多うぬを敵は  
四方を圍まれて防ぐは術も何うも言へる  
輩もあらず、然るに断然不服の回答もあらず、左  
猶豫うち又次の日、軍監と听えし田島圭藏と

喚々者弁天崎の臺場より来り、榎本姓の謁せん  
と請ふふを姑く御待りしとて永井玄蕃川村  
祿四郎相馬主計の三名が急ぎ五稜郭より走到り、  
々の旨報知し及心を榎本を承諾し、頼て五稜  
郭と立出づ千代が岡より赴きて、此所より田島  
會做をみぞ圭藏へ懇懃し順逆の理解を演べ名義  
名聞を明らかく説く頼り、帰順を勧むる体の最  
も懇切あり、以て鎌次郎も腹の裡より大いに悟る  
所あり、部下の物議を憚るを田島の好意の厚  
く謝されど降伏の義を肯せざ一言の下し謝絶せし

うべ田島を望み紙失ひながるも又榎本の生質紙  
壯んありと思ふふぞ既別る時臨み覺え  
落涙よ及びつ斯の如くの英雄を再び得回らるべき  
を瓦礫と俱に碎らん事 皇國の御為に甚だ惜む  
所なりと言ふ紙榎本所ざる振よと明日も軍前  
よと出會をべしと言捨て其儘五稜郭へ退り是  
よ於る榎本をちや是もてと思ふふぞ瘡負或ハ病  
者よのおのく金と分與へる湯川村へと送出し其  
餘郭中なる強壯の士を生前の思ひ出よ潔く一戦  
しと俱に討死をせんしと夫等の心構へとと郭外

の家屋をば火紙放ちて焼拂ひ決戦の便宜紙計る  
程よ開が中よの死に臨み心臆まる輩もわれ  
を其夜窺りよ筏を編と壕紙渡りて此郭と脱官  
軍方へ降るもろ紙他の脱士等が聞知り捕んと  
おしめら紙榎本へ固く制し此期よ及びる生命を惜  
む紙禁めら何の益りやらん心の俛よ落し遣まら  
却つて門扉と押開き出るよ自由を得せしめたり  
とぞ介をまら辨天崎の砲臺よてら官軍方より帰  
順の旨と既よ説諭よ及をせしとど衆議區々なる  
紙りて尚決答よ至り兼しとらや十五日を糧食の

悉く竭ぐれを花々しく一戦して討死杯と燦るも  
 られと士卒等勞ましく用汝為ねを遂に降伏と一定  
 して使汝官軍の陣營に送り其旨歎願し及びし  
 海陸軍の監軍の内各一名宛出張りて恭順の實効  
 汝篤と見聞ありし上其儘臺内に謹慎し追ての  
 朝裁汝相待べく尤も帶釵を除くの外兵器へ悉皆  
 差出を命じ了る旨夫々演説ありて食糧をども授與  
 せらる飢を凌ぐせらるしとを然とせし五稜郭へ  
 道路隔絶したる故榎本等甲乙を此降伏汝知らむ  
 と云ふ此日まに千代ヶ岡へも官軍別に使者を遣

えし降伏の旨汝説諭ありし此千代ヶ岡の主將と  
 聞えし中島三郎助と喚ぶ其性剛氣の老人よ  
 曩に九隻の軍艦が品川灣を脱する時ふ榎本の  
 命に従ひ其頃濱御殿に彈藥許多筆置る汝  
 船に積入ると做しつて汝番士等制し止めし  
 三郎助に一策を設け我が番士等と應接のうら汝  
 等も彈藥を悉く小舟に積込急ぎ軍艦へ漕去と  
 と人夫等示し置き率へ来りし兵隊に番士の詰  
 所汝取圍ませ单身玄関へ打通りて遮らんとする  
 番士に對ひ和殿等も長官の指令に依り彈藥を護

近世紀略

十三編卷三

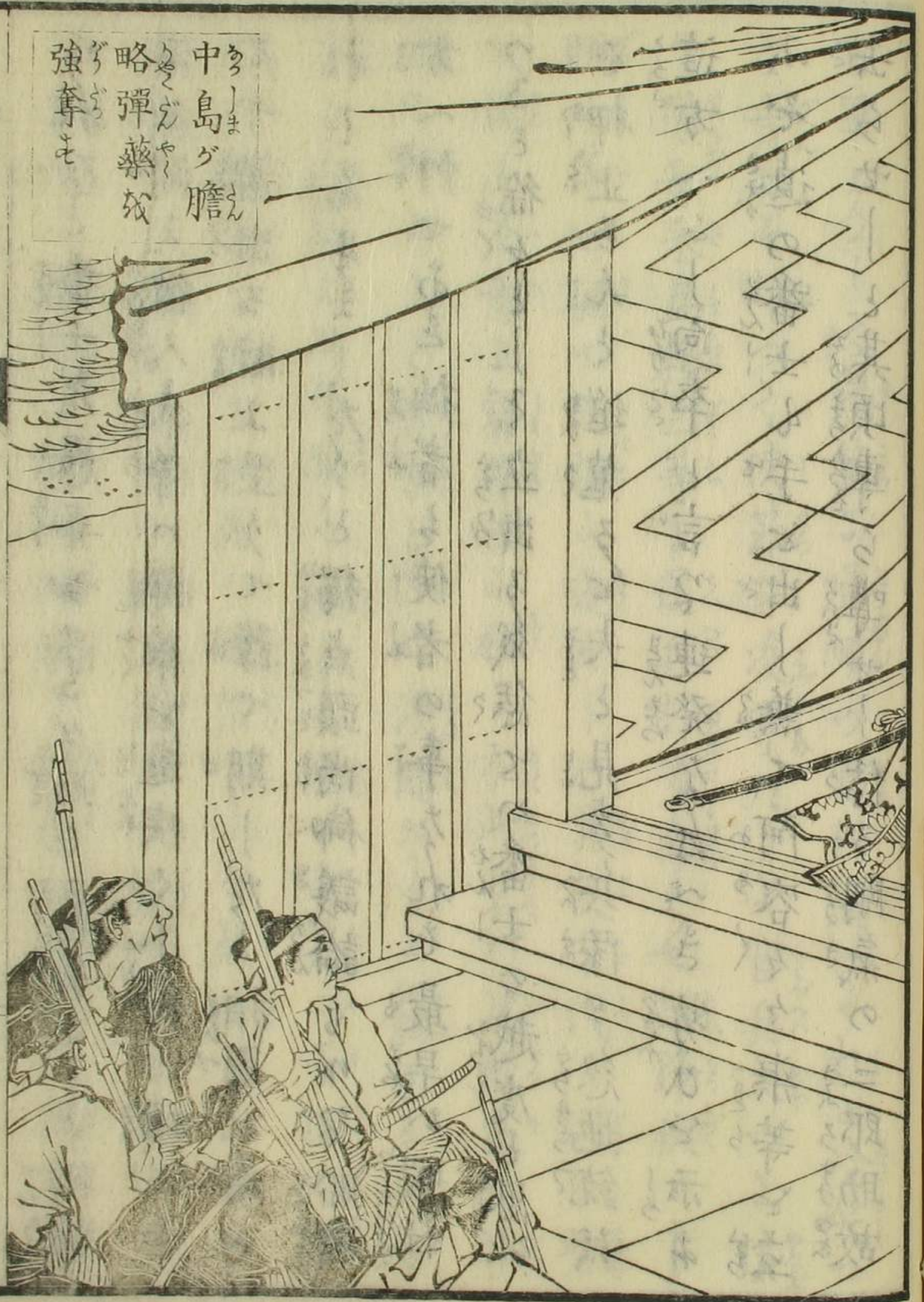
三

衛せらるる職務も名猥りふ渡一巨一とわれど某も又  
 船將の指揮より出張為たれを拒るとて其意は  
 任せ何條空しく引退く廢れ和殿等尚も渡さすと  
 るら其長官へ委状を達し其長官より我が船將へ  
 掛合し及なれ萬一適當せざると決せを積返さ  
 んも最輒しなと喋々議論し及ふと雖も番士等も  
 又諾る言ひる趣き其意を得て先彈藥を積入  
 るんとたり船將より書と捧げ允許と得るよ  
 至りなれば我輩も某の艦へ倂々の彈藥を渡せ  
 廢れとの指揮りる廢し今允許もなく指揮もり

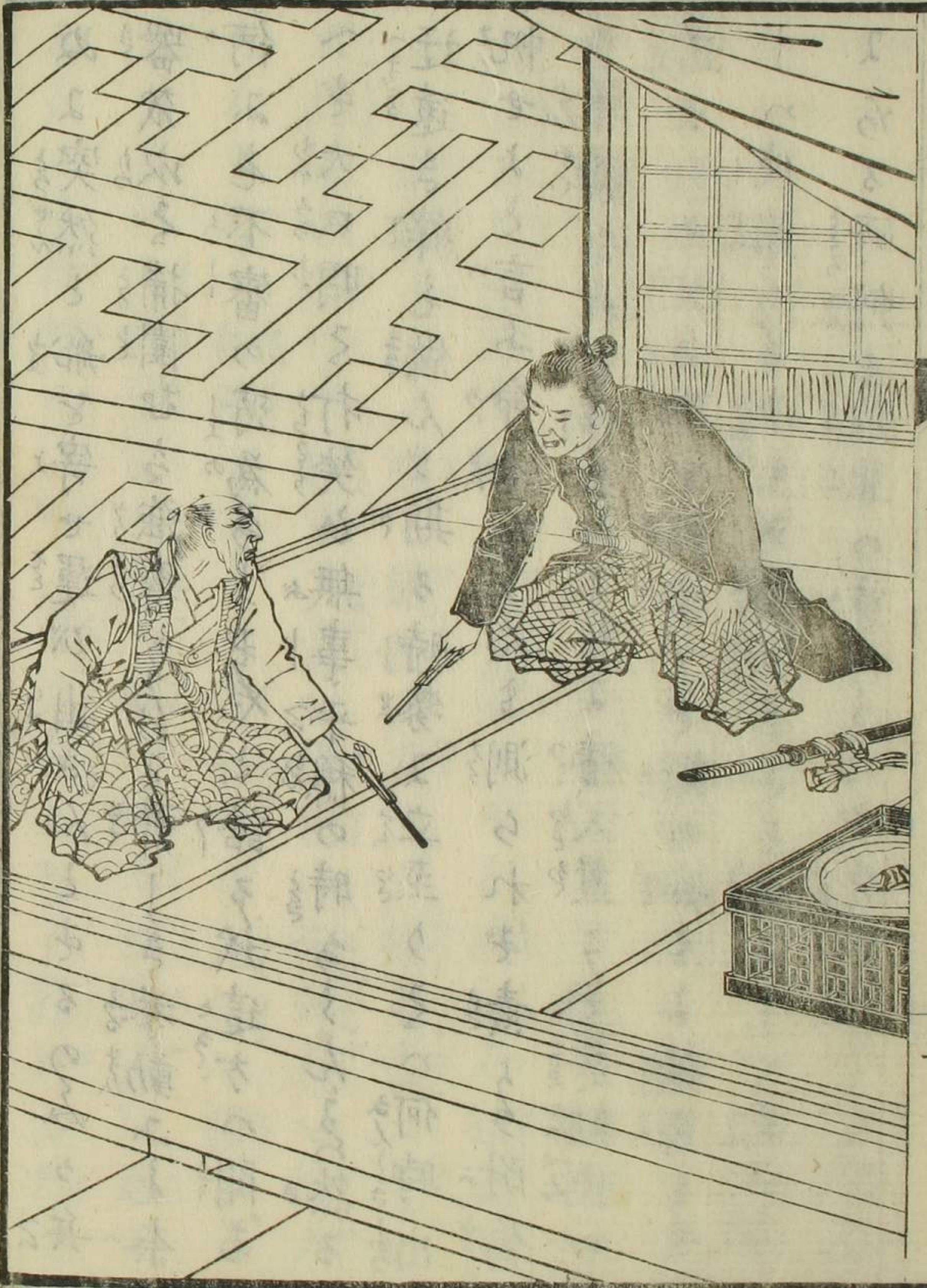
ぬと突然と船を寄せ運び出さんとまゐるのみ兵  
 器強以て捕圍むる強奪なるは齊しき拳動も奈  
 何ふも不審の所為ありと詰る強這方へ聞あ  
 へむ大口明く打笑ひ無事平穩の時ありん然る  
 迂遠き緯も做んぐ斯る時勢に立至りく何時出  
 帆せよと言ふ命令ありんも測られぬ素より附屬  
 の彈藥なれを緯るはち積入置とを是輕便の  
 道るらめ又兵隊と引俱して斯の如くは捕圍ませ  
 一使節たる小生強警衛さるる為し是軍律  
 一ある所何ぞ強奪の意ありんや先生宜しく諒察

近世紀聞  
十二編卷三

中島ガ膽  
略彈藥  
強奪モ



近世紀聞  
十二編卷三



五

りれなど番士茂愚弄るせうが如く最長々しく辨論  
 まる間も彼人夫等ハ彈藥を逸疾く小舟に積入と  
 ちや漕出する時に至りて豫て期したる相圖を為さ  
 れを為ましましたりと獨點頭尚御議論もゆる船將  
 方へ仰せあは拙者も使者の事を最早か暇仕  
 つると徐々として立出る候儀てハ番士の越度と思へ  
 を押止めんと追蒐ると夫と見たり兵隊が忽地銃發  
 這方へさし向卒と言ひ連發なるべき勢ひを示し  
 みぞ道の番士も手を出し兼て阿容々々渠等と立  
 去らせしと其頃専ら噂せし信る剛氣の三郎助故

官軍より一々懇篤に帰順の旨を諭さるれど冷笑の  
 と肯せざ却つて使節を凌辱たりし官兵大いに憤  
 り隊長来島頼三等は選兵許多率をせ尚降伏せし  
 脱士等と驅て先隊を進ましめ其夜千代が岡の砦  
 と圍と不意に襲撃する程に元此砦ハ津輕家の陣  
 營の跡よしと要害とて毛淺間なるよし籠もる兵も  
 多うと糸と三郎助も些と毛屈せざ其二子恒太郎  
 房次郎等も既に決死の時至りしぞ見苦しうとぞ  
 防戦しと俱に此岡の露と消んと砦の中と馳巡り  
 て要所へ射方の兵隊間配り彈藥の續らん程と敵



残柵外は近付ふと大音声は喚ろろつ最も烈しく  
指揮せしつべ兵士等是は勵まされく構の堤は駈  
登り寄手と直下に見たりつ乱射する事頻りある  
ふぞ勢ひひたなる官兵も進と兼て猶豫と隊長来島  
頼三は憊と見るより眼を怒らし丈の知はたる賊  
徒等が死物狂ひよ働くとも何程の事らるべたど疾  
此柵と踏破とと躬は弾傷を受ふぐ衆は先立進  
之向へ是は是は従ふ樽澤何某その他数名の壮士等  
が来島が勇氣は奮激做しけん我劣らと走り出  
て壕と踰え又柵を破りて討入る太刀の切尖鋭く

爰と先途と攻蒐とを例の中島父子三人宛然猛席  
の暴たる如く部下の脱士は指揮しつ這所は露ん  
且彼所より出て奮戦する事救刺は及べ敵を許多  
撃取ると躬方も斃る者多く中へ苦戦は堪兼て  
や其場は脱しと逃るもつらと頼と尠なくなりた  
るのみり父子三人も数十箇所の既は瘡傷と負ふ  
たる事故らは是れと心は決し群が敵は割と  
入りあひて斫死為たりし最花々しき働きなりし  
が茲は柴田伸助と喚ろ一名の老人なり浦賀奉行  
の同心を勤めし身は少給の者なれど頗る義氣あ

る老人よて脱艦の時より中島の手に付属しつ  
俱よ若我成り居たるが今日我限りと決心なりん  
三郎助の邊り我離れを渠が斃る時よ至りて齊  
く奮死したりとぞ是ふ於て千代が岡の若も遂に落  
去よ及び残るは五稜郭のみなりれど彼所の將士を屈  
せる色なく百騎が一騎となりませも死むを此郭を  
立去らトと念ひ込て居る折より官軍方より使  
者とりて酒五樽よ書我添たる成榎本よ送うたる  
成披き見ると其文よ曰  
昨年来長々の御在陣御苦勞よ存候陣を過日

醫師と以て足下蘭國御留学中御傳習の海律全  
書二冊我邦無二の珍書たる成鳥有し属し候段  
痛惜よ被存 皇國の為御差送よ相成候條深く感  
佩致し候何と他日譯書と以て天下よ公布致せば  
候先ハ御厚志の段拙者共より相謝し度輕微  
なりし麤酒五樽之成進ト候傍郭中一統へも  
御振分被成度存候此段申述候也

五月十六日

海軍參謀

榎本謙次郎様

侍の如くよ言越たるは十六日の事より此日又薩州

の藩士何某と喚者五稜郭外より来りて使節の旨を言入るみぞ聽て脱士の其内より齋藤辰吉立出き其来由を語ぬを件の使者を會釋し今暁の戦ひは幸ふし千代が岡と抜けを直らば進んで五稜郭をも襲撃せんと欲されど貴方は於て敗走の後にも狼狽ゆるん事と測り先報知るに及べるあり宜しく兵備の整ふ日と刺して返答せられよと言ふ辰吉打笑て官軍より我が敗兵と憫と使節を煩はさるれども斯る細事と鎌次郎は今更申告るよ及むば貴方の便宜は随ひて何時たりとも進

撃つと我輩は是鳥合の脱兵姑く天兵は抗せしむ往々敗れ及びたる末日を約せんとを争て堂々官軍は匹敵する事能はんやと演説は使者に打點頭言る所實は余は我は匹敵する程なる彈藥糧仗の類をば送りて軍備を助らんと言ふと打聴く辰吉は覺えを声張勵まして今敗軍の末なき聊々夫等の備へを望み且両刀腰に佩し手て空しくして死を辱たあはれ只一戦を待のみをなれば御懇志の段辱をなれど其御配慮も及むばと断然言を放ちたるみぞ然らむを左も右もとて件の使者を

退り余を五稜郭の兵士等へ既より千代が岡  
 の落去りたる紙知るのこゝ此夕暮は弁天崎の  
 臺場は籠り一躬方さん降伏せしと聞及べり頼  
 と勘ましく思ひらん必死と決心せし中みも変心な  
 せる輩のゆるぎ抜くは忍び出漸次は降伏する程  
 は榎本松平の両總裁も今の名を是迄なりと意気  
 決したる事やゆるぎらん衆を集め諭して言ふ  
 やう我輩曩も諸君と俱に君家の為は協力し  
 縦ひ如何なる困苦をまゐるとも死なむ己と盟  
 ひたる其丹心を毫をうりも動らんやうをゆる

ども宿意破遂る事を得て憚る姿は成行き  
 ての數日を保つ事へ得うと今限りゆるぎ兵を  
 めて六十餘州の大敵は抗し罪なき士卒被害せん  
 事忍びざるの所を既先の日俺們兩名首  
 謀の罪と謝せんため衆に代りて自殺なさんと短  
 刀は手と掛たるは塚大塚霍之丞等甲乙三名見認め  
 固く禁め一故又情々と考ふるは俺們が身と潔く  
 せんと憚りて自殺しとるは尚其害を諸君に殘  
 まるは大丈夫たるの所為はゆるぎ因て兩人衆に代  
 りて官軍の陣前に至り我輩猥に干戈を動かし抗

戦なりたる罪を訴へ 皇裁と仰ぎ奉り甘トて天  
 戮に就んと則ち決意をなされを各位憤怒の志気  
 死棄時運の然らざるを悟るる俺們が意に就  
 よと最懇篤に説諭せを愁然として顔見合せたる  
 衆庶等齊しく小膝張找り我が輩に代らんとあり  
 両總裁の御芳志を謝するに辞なくと雖も俱に干  
 戈を動くたる罪を是彼同一なるに成 両君をのみ  
 天戮に就しめ争う傍視する事を得ん固より生死  
 を俱に做んと盟ひし辭も何る物を手と空しくし  
 て何るにま 歎杯議論數刻に及べり成尚榎本と松

平が懇々事理を説得したるに衆庶も返を辞なく  
 咸血涙を流しつ遂に其理に伏せしガ升が中荒  
 井郁之助大鳥圭介兩名のまへ海陸軍の將たる成  
 りて両總裁と侶俱に往る 皇裁成仰ぐんとりふを  
 是より禁むる事を得む望むふ任せく一定せしむを  
 是より於る總裁より使者成官軍に遣をしる俺們明  
 朝七字を期して出る軍門に降伏をせを願ふる其  
 期に及ぶまで砲成發せしむを止られよと通達し及  
 ひ置いて先や名残の酒成酌んと將より卒に至る迄  
 其夜酒宴を設けしりと涙は胸のむまろれれば誰と

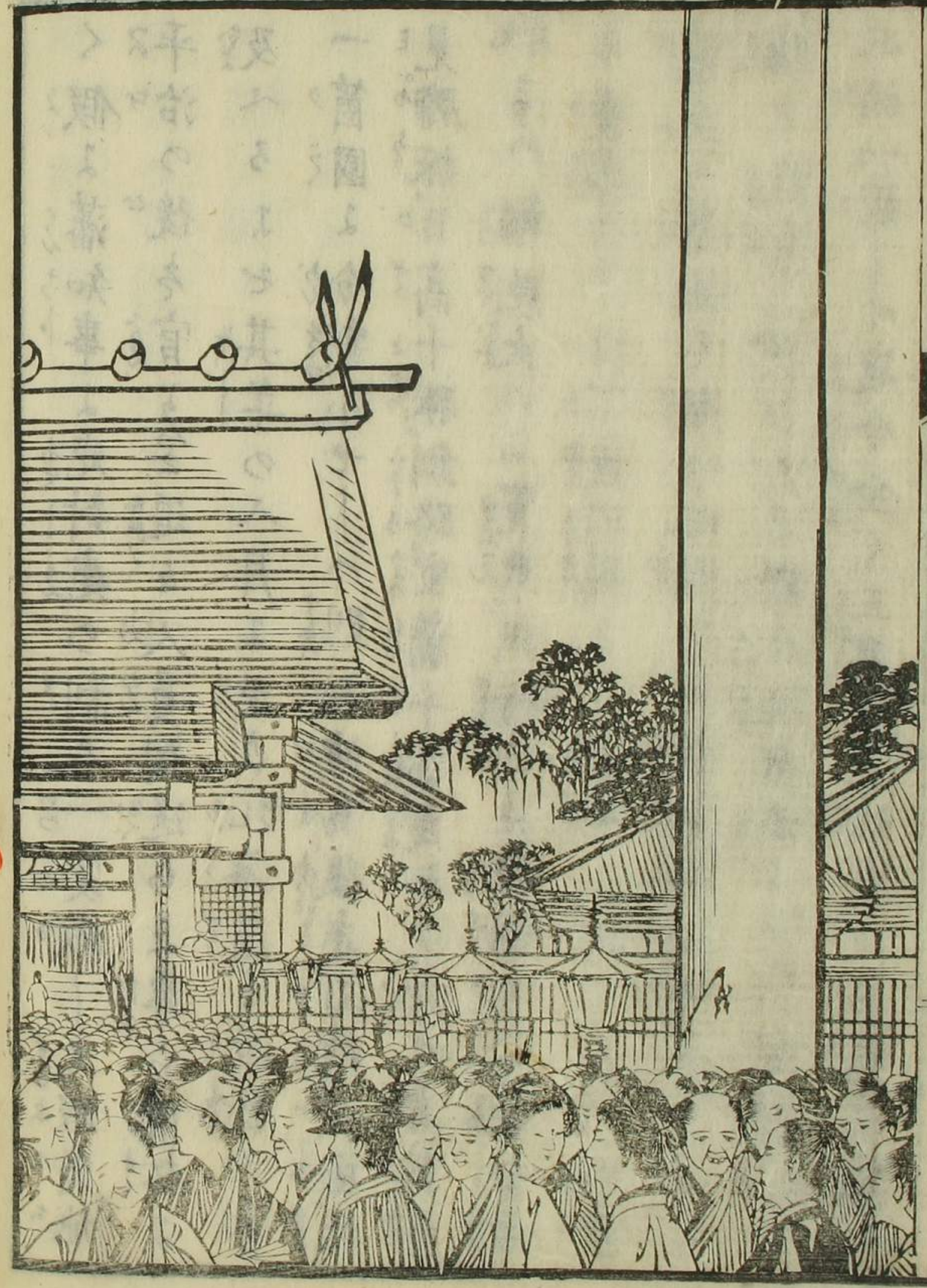
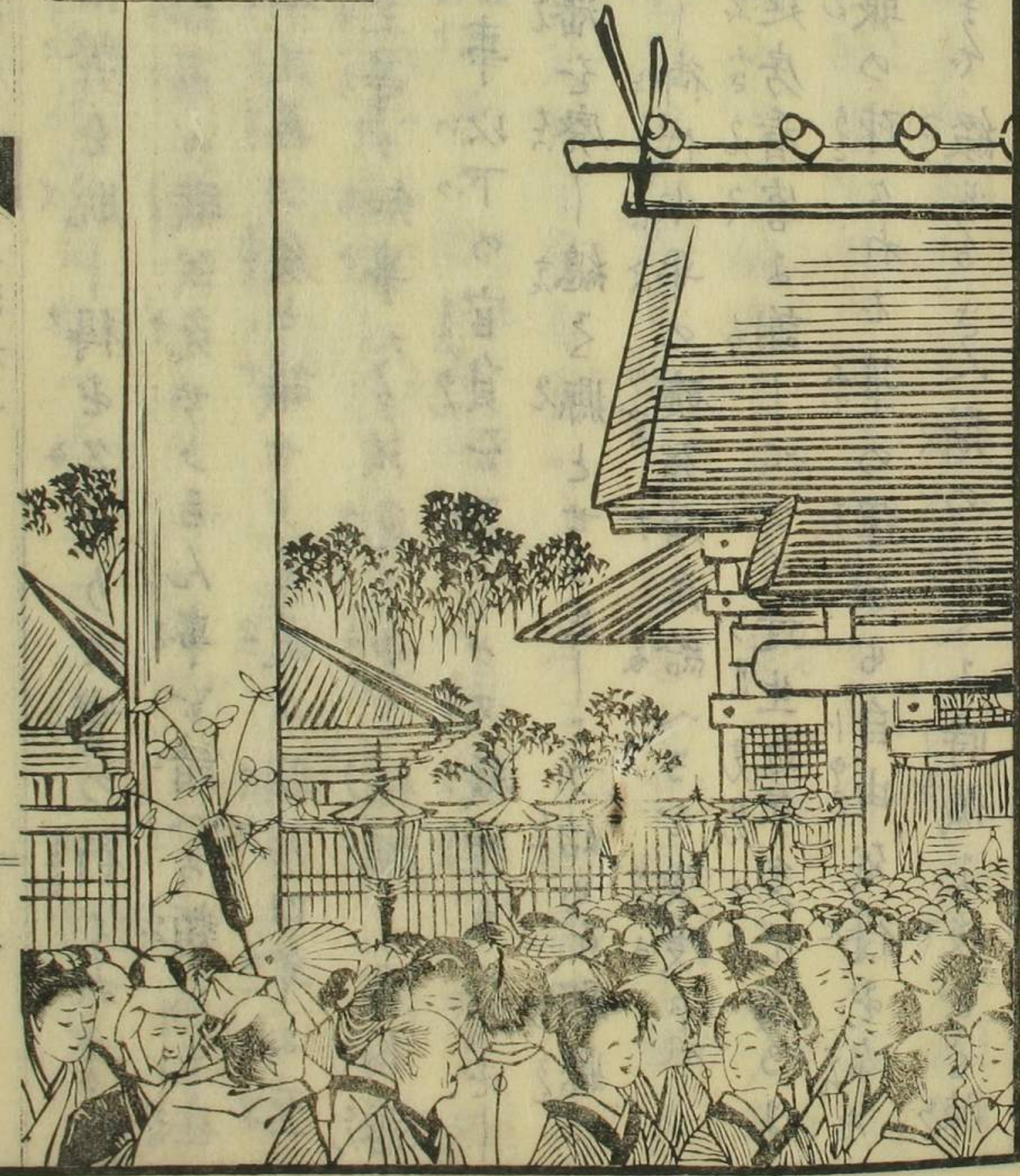
て醉死まひち發たまるもなく郭中かくちゆう常つねより蕭然ひっそりとせり憊うり  
 翌朝よくあす七字しちじは榎本えのの松平まつらと先まとして荒井あらい大鳥おおとり俱とも  
 四名よんめいが寄手よせの軍門ぐんもんに至いたりつ、則すなはち巨魁きょがいたるは依よ  
 り身を天戮てんりくは就つん事を望のぞみ尋たずては無罪むざいの士卒しそ等ら  
 は寛大かんたの御處置ごよちを請こへるふを官軍くわんぐん方かたもを領承りやうじやうせ  
 られ其日そのひの午後ごご二字にじに至いたり五稜郭ごりやうかくを受取うけとり  
 軍監ぐんかんたる前田まへだ雅樂やがくの二小隊にせうたい引ひき俱ともに來きり又また  
 榎本えののと應接おうげつあり兵器へいきその他その他の物品ぶつひんを具そなへ目録めいらくは  
 引合ひきあせ受取うけとりかのく佩刀へいとうのては免まりて函館えんかに  
 寺院とんいんに入いり又また彼弁べん天砲臺てんぱうだいもく謹慎きんしんをせり輩たぐひ

と俱ともに津輕つがる弘前ひろさきへ移うつりて付つき彼室蘭べしつらんは分隊ぶんたいは  
 たる二百餘名にひゃくじゆうめいの面々めんめんも此趣こゝろき報知ほうちなさんと  
 則すなはち官軍くわんぐんの許可きょかを得える齋藤さいとう辰吉てんきちが走をり同所どうじよの  
 頭人かぶとび澤さわ太郎たろう左衛門ざゑもんは是等これらの旨めいと言聞ことばきせ俱ともに降伏かうふく  
 するさしめり是れ依より蝦夷地えぞの拳動けんどうも遂つひに平定へいぜい  
 及び及び先まに巨魁きょがいたる榎本えのの等ら四名よんめいと東京とうきやうへ護送ごそう  
 せらば政府せいふの指令しつめいを得えたる後残のちのこる降人かうじん千餘人せんじゆうにんと送おけ  
 り尋たずね官軍くわんぐん凱旋がいせんに至いたりて戊辰ごしん以降いこうの争乱そうらんも爰こゝに  
 全まく納なまりたる故ゆゑ是等これらの役やくも戦死せんじなしたる其その  
 靈祭れいさい祭まつりらんとして番町ばんちやう九段坂くだんざかの上うへに招魂社せうこんしゃを建築けんちく

せらま正五九月に祭典あり又勲功の何れと聞え  
 一兵部卿宮大宰帥宮九條左大臣以下二十三家島津  
 毛利以下九十餘藩西郷隆盛大村益次郎以下百餘  
 名に賞典禄且賞金を賜ふ干時薩長土肥の四藩に  
 封土私私有をばんと論し土地人民を奉還せ  
 んと上表し請ふに因り自餘の諸藩も又從ひて  
 漸々おほき願ふせども朝廷私に決断せむ大い  
 衆に議せられ後既にして許さるゝ至り公卿  
 諸侯の名称改め總て是等と華族と唱え新とよ  
 府藩縣三治一致の政度を立從前の諸侯とめて姑

く假に藩知事宛封建の制を一變做し又蝦夷地  
 平治の後を官より追々人員送らせ専ら開拓に  
 及べりよぞ其年の八月に至り北海道と改稱し十  
 一箇國に分割おせし則ち渡島後志石狩天塩北  
 見膽振日高十勝釧路室蘭千島是なり倭て其翌月  
 九月に朝廷大いに寛典發行をば彼輪王寺宮を始  
 め慶喜ぬ以下奥羽越えに官軍に抗したる旧諸  
 藩主の禁錮を赦され後まゝ榎本等以下もあつて  
 總て赦免し及びたる斯仁恤施されば府藩縣の  
 三治一致して政令全く王室より出せと又或ひ藩に

九段坂の  
招魂社に  
貴賤群参





依り尚旧弊を脱し得る名有りて實の行なれざるを  
 患ひ藩知事の職免せらる事と請へる類ひも在  
 残りて朝廷再び衆と議せらる遂に明治四年に至  
 り旧藩主等が知事たり紙免ト更に任撰し各藩  
 へ別々知事以下の官負を置し又幾程もあつて  
 て悉く藩を廢し總て縣とせらるしより始めて郡縣の  
 制は復し御代太平の礎紙居え給へるぞ愛度なれ  
 編者延房看客は謝して云く迂生近年多忙ありし  
 且老眼の疎れを筆の運びも自由紙得ざるを  
 本編も綴るる人斯の如くふ時機は後とす陣

腐は属き紙悔めるは尚佐賀の暴動より至る台湾熊  
 本等の戦争を経て彼鹿兒島の事件に至る紙悉  
 く編んとせを編者も空しく筆と勞しと看人却  
 て倦むやせん殊に西南の如きは其頃具に編纂  
 して發兌せし書も多かるのみ且新聞紙に載  
 るが故に予が拙文を俟てし諸彦の好く知る欠  
 なれを蝦夷鎮静を限りし則ち本傳の局を結  
 べり然一言へ毫も噂せざるに聊に遺憾なきは  
 幸ひ巻尾に餘紙のを只その發る年月と概略の  
 左に掲ぐる紙看る老筆の及むざるを恕せよ

于時明治七年に至り佐賀は測らざるの騷乱與に  
 里原由致尋ぬるは同縣の士族にて前の參議江藤  
 新平も在職の頃同列の甲乙と俱に征韓論且民撰  
 議院を設けらるる趣きは屢建言為たりしも其事  
 不可なるべきの旨朝議決定し及びつ兩説共に行  
 られざるは江藤も不服と思へるより里病痾を托し  
 職を辞し島義勇なる者と謀し合せ同縣ふる頑  
 固士族を竊に煽動做しつても同盟せる者二千五百  
 餘名已等夫が巨魁となりて容易ならずざるの拳動  
 及ぶを推令岩村高俊致始め其他の縣官盡力し

て百説論し及ぶ雖も専ら暴威を盛んに做し  
 縣廳より尚いも兵備整えざるうち多勢致  
 以て圍を三日三夜攻たりしは寡をりて衆に敵し  
 已に再拳を圖らん事致議し推令始め佐賀城を  
 一時退去し及びし其年二月十八日の拂曉の事  
 たりしが是より先は東京への電信をりて事の次第  
 を屢通知し及びし一に猛可に朝議在せられ則ち大  
 久保内務卿より陸海軍の將士を指揮して水路を  
 博多浦に著艦あり軍議の手配り速らふし直に  
 佐賀へと進撃し及べむ城中ふる暴徒等の一恃勢

ひ成得一ふ似たるも豫て鹿兒嶋山口をどの他  
 縣より一之叡援を約せし士族もたれたるねと爰  
 に至りて更之應せむ且官軍の進める事最も銳り  
 至りて暴威漸次衰へて遂に抗ざる事成得を降  
 伏帰順せしむるも又脱々逃るるも有りたる并  
 中江藤新平島義勇の兩名尚為を所りたるも  
 書を城中に残し置て同士甲乙侶俱に窺ふ佐賀と  
 脱城を先鹿兒嶋へと忍び行て該地の士族を煽  
 動せんと窺りし形勢窺ふる旧藩主島津家より  
 懇々説諭せしむるも士民等異事と與る休なく

却て佐賀の残黨を敵視せざるの趣きなれを義勇  
 等案に相違して太と困却に逼るる処に佐賀捕吏  
 に見認らんと三月七日に搏せし江藤を辛く其  
 地を去て日向に走り伊豫に渡り後土州へ趣きて  
 尚も再挙を計らんとしつれど應ずる者のなれたのみ  
 何地も追捕の嚴重なり遂に身を置く所なき  
 一時甲浦の戸長を欺き旅宿と索め安眠するも  
 却て渠に密告せしむる并所りて縛り就たるは同月廿  
 九日の事にて餘黨の逃亡ありたるも咸追々搦捕  
 是江藤島と始めとし其軽重をありと雖も何とも

刑の處せらるゝは四月十三日なりと言ふ是は於て  
 佐賀の暴拳を遂に鎮定ふ及びしは又七年の四月  
 に至り我が軍艦は臺灣へ差向らるゝの事件起り  
 什麼臺灣と言へる地は支那の福建省泉州府なる廈  
 門港の東南に當る則ち一大島ありて此島東部  
 西部と別は西部に人氣も開けたると東部の無下の  
 野蠻にて尙旅船おど過りて此地に漂着する時  
 土人等荷物を取奪り甚しきは乗客を殺して肉を喰  
 ふと言ふ然るは明治四年の冬我が琉球船漂流して此  
 東部の地に到りて土蕃等は是を劫りて殺さるゝ者

五十四名又六年の三月より小田縣下の住民四名此島に  
 漂着して俱に暴害せられたるは此事瑣末に似たれども  
 國威に關するのみならず向後彼地を航海する者斯  
 る兇暴の所為に遇ひ屢非命に死せん事と朝廷に於  
 て憂慮せしは副島全權大使を以て支那へ談判の云  
 云に依り西郷陸軍中將と蕃地事務都督と陸軍  
 少將谷干城海軍少將赤松則良の両氏を始り遣兵  
 をむつゝ三千餘人肥の長崎に集合りて此所を軍  
 議決定の上則ち五月二日より追々崎陽を發船し  
 臺灣の地へ着岸りしは此東部に住む土蕃等の内

熟蕃生蕃と言へる所りて熟蕃の徒々海濱に住めば  
自うろろ人氣も開け我が軍艦の向ふく雖もとて抗  
たる氣色も亦く帰順の休後露せと生蕃の徒々山家  
所りて獸々等々輩々れを或へ草深き所は潛て斥候  
よとて孤出ふしたる我が兵士をを狙撃たうらむと悪むべ  
きの所為の事とて固より這回ハ鎮撫を旨とする事とて  
妄りて兵器を動かさずべきの御趣意の所りてされど渠  
は害心所ると見くへ打捨置る事なうらむとて五  
月廿一日より生蕃の地へ兵を進め山野を獵りて巢  
穴を探るる蕃夷を例の狙撃たうらむを躬方ハ負傷

も所りて前後三回の襲撃は總々の賊巢を焼  
拂をせしみ兇惡極まる蕃夷等も尚山深く逃入て一時ハ  
影を躲せしうと遂に飢渴を迫るよりして彼熟蕃の首  
長は就て降伏の旨を乞ひ我が軍門におのく来りて  
齊しく罪を謝したるハ七月一日の事より蕃地も平定  
し及びしよ支那に於てハ副島大使と曩は談判整ひ居  
たる後爰に至りて異論成唱へ臺湾の地へ兵を向し我  
甚だ不平の趣きあるを彼地は滞在の柳原公使が種々  
弁論も所りて末更は太内務卿を全權辨理大臣  
とし随員數名と侶俱は則ち支那に遣はされ九月

廿三日より彼方の總理衙門に於て清國の大臣等と百方談判に及ぶると雖も因循よりして時日と延し和戦の両議決せざるのより其答辨さへ曖昧ありし我が大臣は憤懣に堪む則ち断然意を決して帰朝做んとせしむと一時北京に在留ありし英國の公使ソルウエード氏が中裁よりして和議整ひ遂に五十万兩の金を支那より附給するの約を定め大久保大臣より帰朝あり尋に臺灣に出張するたる西郷以下の將士も總て凱陣に及べり其年十二月の事ありとぞ恁に明治九年十月に至り肥後の熊本に旧藩士のうちより神風連など稱る

黨へ只旧習の及泥を開化の何物も我知らぬに廢刀其他の新令の出るに快しとせざるより縣吏を惡むと甚しく不平の念慮止まり匡いて上野堅吾加陽霽堅太田黒伴雄等巨魁となり同志の面々百七十餘名と俱に同所藤前八幡ある社内にて軍議を決し同所の鎮臺を始りて長官等の居宅を襲ひ不意に亂入する故安岡縣令種田少將等へ暴徒の刃を空しくせられ其餘命を殞せし多く一時街の騷攘に最も甚しかりしと官に於ても夫々鎮撫の手配速くするより其他の士族等の此群は煽動するも何らざる事

廿三日ふ発とと忽地兇徒の勢ひ究り成り自刃一又ハ  
 自首一捕縛せらる輩も有りて幾日もつらへ熊本の暴挙  
 へ頓ま平定まされど尋て秋月山口は拳動の起る旨趣  
 派聞くは筑前の國秋月の旧藩士族は今村百八郎宮崎  
 車之助と言る有りて豫て熊本なる神風連と牒ト合せ  
 一事有り一ふ廿四日の襲撃を聞より陽は鎮撫と云と  
 名として同藩士族を會合をきりて説て頑固の士と荷擔  
 ひ姑く暴威を逞しうせりも豊前の豊津の旧藩士等が  
 計る所は陥りて事成らざる派知るが故は宮崎の同志甲  
 乙と割腹し及びふ今村の尚命惜氣は姿とやうに逆廻り

一城肥前の田代も縛せり自餘の兇徒と侶俱に既は  
 刑に處せられたるは同年十二月三日より是より先周防  
 の山口も旧藩士前原一誠と聞えり維新の際に功あ  
 りて其頃従四位に叙せりて兵部大輔に任ぜり是れ  
 已歿得ざるの事故有りて辭して故郷へ立帰り鬱々と  
 して年派経るうち開明日々ふ進歩して昨日と今日ハ  
 陣腐とまじり前原が我ハ顔は人ふ對して説所も世は  
 適らねるは憤懣と抱きりてある事の企て彼熊本なる神  
 風連その他諸藩の旧士族とも密話をなしたる事も有り  
 一は這回熊本の拳動を聞き速く鎮静し及ぶべくも

思えねべ時取ての好機會と豫て同盟を所の奥平  
 謙助横山俊彦と始り旧藩の士族二百餘名と密計を  
 示し合せ徳山其他の旧藩士族の檄文と飛して黨を  
 集め一時表裏の策と設けて長州萩の城下を襲ひ須  
 臾の勢ひと得し似たるも茲は関口縣令のりて是等  
 の暴挙と聞ゆるも急を廣島鎮臺に報じて臨時の出兵  
 ありん事と請ひ且速に鎮静をさんと百方尽力せしむ  
 しく前原が淺智ありぬも遂に術計尽果て彼奥平横  
 山以下六名の者と侶俱に小舟に乗じて雲州を渡り尚  
 做を所ありんとせしむ十一月三日は捕縛され餘黨も討

且捕へらして翌月三日は前原始め各々の差ありと  
 雖も何とも刑に處せしむたり然るも明治十年は更  
 に鹿兒島は事起りきりも維新の功臣なりと美名を  
 全國に輝し彼西郷隆盛も豫て其身の主張ありたる  
 征韓の論行をれざるより辭して鹿兒島に退隱しつ農  
 事より心孤委居たるも計る所のありしあや私学校と建  
 設せしむ集合の黨夥しきも常ふ異論と唱ふる事  
 多く十年一月三十一日は陸軍の士官等が同縣下なる  
 弾薬と他へ輸送せんと為たりしと私學黨等が掠奪  
 むしぐ事と發する端緒ありて遂に西郷隆盛の政府へ



尋間の筋ゆりとして桐野利秋篠原國幹を始めとして精  
 兵一万五千人其月十五日、鹿兒島を發して陸路と熊  
 本へ至り一時を九州の士族招ぐばして來り靡えの  
 勢ひなりしも同所鎮臺の司令長官陸軍少將谷干城  
 を英智膽畧衆よ超えし参謀長たる樺山大佐等と只  
 籠城と上策と一々猥りし兵と動さば薩兵屢々來り  
 攻むるも防戦し手を盡まぐ故に爰も數日を経る  
 と雖も屈まる体も見えざるうち既に官軍海陸よ  
 里進し城に應援をさんとするに薩兵も又あきを  
 迎へて俵坂且吉次越など各所よ於て遮れば數回の

苦戦言ふをりなれども將校及び士卒等さへあめく決  
 死の奮勇をゆるし辛うして熊本城と連絡を倣  
 せしに至り漸次は薩の兵威衰へ遂に間道より彼城  
 山に楯籠り一時暴威と奮ふに似たるも官軍四方  
 八面を圍つて砲撃する事虚間たるは遠の西郷隆  
 盛も防禦の術計尽果たりし桐野等自餘の甲乙と  
 俱に自刃し及びつ城山の露と消たるは又是非もあ  
 事なりしを此拳や十年一月の三十一日事起り同年  
 九月廿四日は平定し及びたる日數を爰に算ふとを  
 凡二百三十餘日の最も長きに至るも砲声の聞えざ

近世紀聞 土編卷三

る日と僅ふ數日間をれを維新以降の挙動のうち  
 よて冠たる所の騷攘あるを自他の死傷へ幾許なるを  
 ん歎むるも尚餘りあり介どもやうな明治の御代  
 の其後へ立る波風もななく斯く今日つ太平と仰ぐ  
 又歡をしき事よなる

近世紀聞十二編卷之三 八尾  
 北島茂兵衛  
 稲田佐兵衛  
 山中兵衛  
 小林新兵衛  
 出雲寺萬次郎  
 北澤伊八  
 太田金右衛門  
 山中孝之介  
 田中治兵衛  
 水野慶次郎  
 山藤貞衛  
 辻岡文助發兌

# 東京

# 書肆

通壹丁目	北島茂兵衛
同二丁目	稲田佐兵衛
芝三嶋町	山中兵衛
通二丁目	小林新兵衛
横山町壹丁目	出雲寺萬次郎
浅草茅町二丁目	北澤伊八
横山町三丁目	太田金右衛門
本銀町二丁目	山中孝之介
馬喰町二丁目	田中治兵衛
通油町	水野慶次郎
馬喰町二丁目	山藤貞衛
横山町三丁目	辻岡文助發兌

